

日本語動詞接尾語「めく」の意味・用法について

李 静 玫

一 はじめに

動詞接尾語とは、つねに他の語の後に付いて動詞を派生する接尾語のことをいう。このような語構成上の特徴から、動詞接尾語は結合する語の語基によっていくつかの種類に分類することができる。その中でも「めく」は上接する品詞の種類が多いため造語力が高い、いわば最も接尾語らしい接尾語ともいえる。そこで、本稿では『日本国語大辞典』から収集した「めく」の付く二九五語の派生動詞を対象とし、それぞれの意味について分析を加えることにする。この分析を通じて、動詞接尾語「めく」の意味・用法の特徴をさらに明らかにしたいと思う。

二 辞書における意味記述

『日本国語大辞典』第二版 小学館 二〇〇一
め・く

【一】〔接尾〕(五)(四) 段型活用) 名詞や形容詞・形容動詞の語幹、副詞、擬声語、語根などに付いて動詞をつくる。そのような状態になる、それに似たようすを示す、などの意を表わす。「春めく」「人めく」「罪人めく」「なまめく」「ことさらめく」「わざとめく」「ざわめく」「ほのめく」など。

『大辞林』第三版 三省堂 二〇〇六

めく(接尾)〔動詞五〕〔四〕段型活用) 名詞や副詞、形容詞や形容動詞の語幹について、…のような状態になる、…らしいなどの意を表す。

夏めく、なまめく、ことさらめく、時めく、ちらめく、ひしめく、ざわめく

『岩波国語辞典』第七版 岩波書店 二〇一

め・く(接尾)《名詞・副詞などに付け、五段活用動詞を作る》…らしくなる。…の傾向を帯びる。「春」「色」「わざと」…いた親切」「遠い昔の遺跡」…いたたかずまい」▽最後の例のよ

うな「めく」は、直前の体言というより「遠い昔の遺跡」全体に付くと解すべきである。

以上辞書における意味記述をまとめてみると、「めく」は、名詞および形容詞・形容動詞の語幹、擬声語・擬態語などの様々な品詞に付いて動詞を作る接尾語であることが分かる。意味としては、「～らしくなる」「～のようである」のように接続する語が持つている性質や状態の発現や、そういう傾向を帯びるという意を表している。

さらに、古語辞典における意味記述を見ておく。

『岩波古語辞典』補訂版 岩波書店 一九九〇

め・き〔接尾〕《名詞・形容詞語幹・副詞について》四段活用の動詞をつくる

① 本当に：らしい様子を示す。…の本当の姿を最もよく示す。「春ー・き」「今ー・き」など。「雨そそぎもなほ秋のしぐれー・きてうちそそげば」〈源氏 蓬生〉

② 一見：らしく見える姿を示す。「親ー・き」「なまー・」など。

「唐ー・いたる船作らせ給ひける」〈源氏 胡蝶〉

③ 《擬音語・擬態語について》…という音を立てる。…という動作をする。「そよー・き」「むくー・き」など。「世界さらー・きののしり合ひたり」〈今昔 一〇、三六〉

『古語林』大修館書店 一九九七

め・く〔接尾カ四〕〔カ行四段活用動詞をつくる〕

① 「体言、形容詞・形容動詞の語幹、副詞に付いて」～のようになる。～らしくなる。～らしく見える。例：「春めく」「池めく」「親めく」「古めく」「ことざらめく」

② 「音やようすを表す語に付いて」～と音を立てる。～のような動作をする。

例：「そよめく」「ざわめく」「ほとめく」「きらめく」

『新全訳古語辞典』大修館書店 二〇一七

め・く〔接尾カ四〕〔カ行四段活用動詞をつくる〕

① 「体言、形容詞・形容動詞の語幹、副詞に付いて」～のようになる。～らしくなる。～らしく見える。例：「春めく」「ことざらめく」「わざとらしく見える」

② 「音やようすを表す語に付いて」～と音を立てる。～のような動作をする。例：「そよめく」「ほとめく」「ことごとと音を立てる」

このように現代語辞書にはない「～という音を立てる」という記述が加わっていることがわかる。しかも、『岩波古語辞典』では、他の辞書とは違って「めく」の「～らしくなる」の意味を、接続する品詞の性質によってさらに二つに分け、①と②の項目で説明している。

以上のことから、「めく」を分析するためには、現代語辞書の意味記述だけではなく、古語辞書の意味記述も参考にしながら、さらに細かく意味を分類する必要があると思われる。

そこで、次では、「めく」に接続する語を取り上げ、品詞別に

分類し、それぞれの意味について分析を加えることにする。この分析を通じて、動詞接尾語「めく」の意味・用法の特徴をもっと明らかにしていきたい。

三 動詞接尾語「めく」の意味・用法

三・一「めく」の分類

「めく」の分類にあたって、まず先行研究による分類から目を通すことにする。

(一) 阪倉篤義(一九六六)

接尾語と接する語基の種類

一 名詞

二 Ⅱ「さや」「しづ」のごとき、いわゆる語根。「たを」「きら」のごとき象徴辞(擬声語・擬態語)をふくむ。

三 Ⅲ「すずろ」「あきら」「たひら」「たしか」のごとき、形容動詞語幹乃至は副詞の類。みぎの(二)に比して、そのあらかず概念はさらに明確で、独立性がよい。

四 Ⅳ形容詞。語基としてあらわれるのは、「いた」「ひろ」のごとき語幹部分であり、したがって、みぎの(二)と本質的には同性格のものであるが、形容詞語幹になり得る点で、それらとは概念内容に差があるかと考えて、別にたてる。

五 動詞

(二) 関一雄(一九七九)

①名詞語基

②形容詞語幹語基

③形容動詞語幹語基

④副詞語基

⑤動詞連用形語基

(三) 山口豊(一九九三)

①名詞を語基とするもの

②語根(擬声語・擬態語を含む)を語基とするもの

③形容動詞語幹乃至は副詞を語基とするもの

④形容詞を語基とするもの

⑤動詞を語基とするもの

まず、阪倉(一九六六)と山口(一九九三)の分類では、他とは違って語の語基ではなく語根を二の項目に入れている。しかし、語根というのはすでに品詞の中に含まれているもので、形容詞や形容動詞、名詞など品詞の語幹と重なる場合が多いので、この項目は改めた方がよいように思われる。また、三の項目では形容動詞と副詞を一緒に扱っているが、副詞の場合、擬声語・擬態語まで含まれることになるから、これもまた別の項目に分類し直した方がよからう。

次に、関(一九七九)は動詞接尾語を上接する語の語基別に五つの項目に分類し、形容動詞と副詞は別の項目に分けている。

以上の先行研究を参考にしながら、動詞接尾語を次のように六

つの項目に分類してみた。

「結合する語基による分類」

- (一) 名詞
- (二) 形容詞語幹
- (三) 形容動詞語幹
- (四) 副詞(擬声語・擬態語・感動詞を含む)
- (五) 動詞の連用形または動詞の語根
- (六) 語素

さらに、上記の項目に基づいて『日本国語大辞典』から収集した二九五語を分類した結果は以下の通りである。

表一 語基による接尾語「めく」の語数

語基	語数	
(一)名詞	86	
(二)形容詞語幹	8	
(三)形容動詞語幹	24	
(四)副詞	副 詞	7
	擬声語	69
	擬態語	94
(五)動詞の連用形	11	
(六)語素	1	

表一を見ると、「めく」は(一)から(六)まですべての語基と結合することが分かる。中でも名詞と副詞との結合が圧倒的に多い。

また、次の表二を見ると、

表二 接尾語「めく」の初出年代

初出		語数
上代	奈良時代	3
中古	平安時代	75
	鎌倉時代	36
中世	室町時代	51
	江戸時代	94
近代	明治時代	13
	大正	3
現代	昭和	5

「めく」は奈良時代からすでにその姿が現れ、平安時代から江戸時代に渡って著しい造語力を見せている。このようなことから、動詞接尾語の特徴を分析するにあたって「めく」はもっとも適しているともいえそうである。

以上の結果に基づいて、次に「めく」と結合する語基を一つずつ取り上げ、意味面において、より詳しく分析を加えることにする。

三・二「めく」の意味

(一) 名詞を語基とするもの

三・一でも述べたように対象とする二九五語の内、名詞と結合する「めく」の語例は八六であった。さらに語例ごとに『日本国語大辞典』による初出年代を調べた結果、表三の通りである。

表三 「名詞+めく」の初出年代

初出		語数
上代	奈良時代	0
中古	平安時代	31
中世	鎌倉時代	2
	室町時代	5
近世	江戸時代	30
近代	明治時代	8
	大正	2
現代	昭和	3

表三をみると、「名詞+めく」は平安時代と江戸時代に集中して多く造られたことが分かる。また、結合する名詞の性格によって次のように分類することができる。

〈名詞の性格〉

① 季節や自然を表す場合

秋めく、春めく、夏めく、冬めく、時雨めく、露めく

② 人の様子や性格を表す場合

主めく、大人めく、親めく、女めく、学者めく、玄人めく、子めく、上衆めく、人めく、益荒男めく、召人めく、山賤めく

③ 時や場所を表す場合

田舎めく、唐めく、古代めく、寺めく、当世めく、時めく、都めく、昔めく、屋敷めく、山里めく

まず、季節や自然現象にかかわる名詞と結合する場合の「めく」は、「秋めく―秋らしくなる」のように「らしくなる」「る」のような感じになる」という意味を表す。また、②の項目に該当する語例の初出の時期も、次のように平安時代に集中しているのが特徴である。

初出…秋めく(一一七七年)、春めく(九四五年)、夏めく(一一七八年)、冬めく(一〇〇一―一四年)、時雨めく(一〇〇一―一四年)

次に、人の様子や性格にかかわる名詞と結合する場合の「めく」は、「主めく―いかにも主人らしい様子をする」「親めく―親のようにふるまう」のように、「る」に見える「る」のようにふるまう」という意味を表している。この場合の「めく」は「親がる」のように「がる」と言い換えられる語例も見られる。この項目で「めく」は、

(一) 「学問もない癖に、学者(ガクシヤ)めいた事を云つては濟まない」

坑夫(一九〇八)〔夏目漱石〕

(二)「わが御くしげ殿にの給ひて、装束などもせさせ、まことにおやめきてあつかひ給ふ」

*源氏物語(一〇〇一―一四項) 帚木

『日本国語大辞典』より

のようにマイナスの意味で用いられる場合も少なくない。

最後に、時や場所を表す名詞と結合する場合の「めく」は、「田舎めく―田舎風に見える」「昔めく―昔風である」のようにいかにもそのものの雰囲気を感じさせるといふ意味を表している。この場合、「田舎びる」のように「びる」と交替できる語例も見られる。

(二) 形容詞を語基とするもの

形容詞の語基と結合する「めく」の語例は、対象とする二九五語の内、八語しか見当たらなかった。

表四 「形容詞+めく」の初出年代

初出		語数
上代	奈良時代	0
中古	平安時代	2
	鎌倉時代	1
中世	室町時代	1
	江戸時代	3
近世	江戸時代	3
近代	明治時代	1
	大正	0
現代	昭和	0

この場合も名詞の場合と同じく、結合する形容詞の性格によつて「めく」の意味が少し違ってくる。例えば、「幼稚めく」の場合

の「めく」は「どことなく幼い感じがある」という意味を表しているが、「余所めく」の場合は「よそよそしくふるまう」という意味を表している。また、「古めく」は、「古びてみえる」を意味するので、この場合は「めく」の代わりに「びる」を用いることも

できる。他に「形容詞+めく」の語例は以下の通りである。

詳しくめく…精通しているようによそおう

脆めく…もろくなる。砕けやすくなる。

若めく…若々しく見える。

(三) 形容動詞を語基とするもの

形容動詞の語基と結合する「めく」の語例は、対象とする二九五語の内、二四語であった。また、表五の初出の時期を見ると、名詞を語基とする「めく」の場合と同じく平安時代と江戸時代に現れた語例がもっとも多いことがわかる。

表五 「形容動詞+めく」の初出年代

初出		語数
上代	奈良時代	1
中古	平安時代	6
	鎌倉時代	2
中世	室町時代	3
	江戸時代	9
近世	江戸時代	9
近代	明治時代	1
	大正	1
現代	昭和	1

そして、形容動詞を語基とする「めく」は、
 派手めく…派手に見えるさまである。

神秘めく…神秘的な感じになる。神秘的な様相を呈する。
 皮肉めく…皮肉のようになる。皮肉の意味合いをこめる。

賢しらめく…賢しらにふるまう。

のように、結合する形容動詞の様子や状態を「〜と感じる」「〜
 のように見える」というように表す場合が多い。

また、「めく」の中には、「親切めく…いかにも親切そうな言動
 をする」のように結合する形容動詞の状態を強調する意味で用い
 られている語例も見られる。

(三)「年老(としより)の癖に厭味たらしく酌して呉るるも
 却って其親切めいたが胸悪く」

*いさなとり(一八九一)〔幸田露伴〕七五

『日本国語大辞典』より
 強調を表す「めく」の場合、(三)のように文章の中ではマイ
 ナスの意味として用いられていることもある。

(四) 副詞を語基とするもの

副詞を語基とする「めく」の語例は一七〇語で、対象とする二
 九五語の約六割を占めるといふように他を圧倒している。また、
 副詞の中でも擬声語・擬態語はそれぞれ、六九語と九四語で、「副
 詞+めく」の語例は殆どが擬声語と擬態語を語基とするものであ
 ることが分かる。そして、それぞれの初出時期も、表六を見ると
 平安時代から江戸時代にかけて絶えずに造られ、用いられていた
 ことが分かる。

表六 「副詞+めく」の初出年代

初出		語数		
		副詞	擬声語	擬態語
上代	奈良時代	0	1	1
中古	平安時代	3	22	12
中世	鎌倉時代	0	10	17
	室町時代	1	11	29
近世	江戸時代	3	21	29
近代	明治時代	0	0	3
	大正	0	0	0
現代	昭和	0	0	1

ここでは、「めく」と結合する副詞をその性格によって擬声語、
 擬態語、それ以外の副詞の三つに分け、それぞれの意味や特徴に
 ついて分析を加えてみることにする。

まず、擬声語と擬態語を除いた副詞を語基とする「めく」の意
 味について考えてみる。

きつとめく【急度】 物事が荒立ってきつくなる。いか

にも、かどだつ。

ことさらめく【殊更】殊更のようになる。わざとらしくなる。わざとするように見える。ことさらぶ。

わざとめく【態】ことさら心を用いているように見える。また、わざとらしく感じられる。

さっぱりめく いかにもさっぱりしてみえる。はっきりする。区別がある。

上記の語例をみると、副詞と結合する場合の「めく」は、名詞を語基とする「めく」と同じく「くらしくなる」「くのように感じられる」「くに見える」といった状態や様子を表す意味として用いられていることがわかる。この場合も数は少ないが、平安時代と江戸時代にそれぞれ三つの語例が見られる。

次は、擬声語を語基とする「めく」の意味・用法の特徴について考えてみることにする。

先に述べたように「擬声語+めく」は平安時代から江戸時代に渡って、大いに造語力を発揮している。この場合も「名詞+めく」と同じく平安時代と江戸時代に多くの語が用いられ始めたことが分かる。

軋めく…きしきしと音がする。きしむ。

轟めく…ひしひしと音がする。ぎしぎし鳴る。

かかめく…鳥獣が鳴く。かか鳴く。

からめく…からから音がする。

かりめく…歯で堅いものをかみ砕くとき、かりかりと音がする

こそめく…こそこそと音を立てる。

こそめく…こそこそと音がする。

ささめく…さやさやと音をたてる。

さらめく…高い音やとどろく音がする。また、さあつという音がする。

ざらめく…ざらざらと音がする。

ざわめく…声や音がさわがしい感じになる。また、多くのものがどことなくさわぎ動く感じになる。

そよめく…そよそよと音がする。

どしめく…どしどし音をたてる。大声でどなりちらす。騒ぎたてる。

また、語基となる擬声語は物の音や声を表しているため、この場合の「めく」の意味は「く」という音を立てる」「く」と音がする」となるのは当然なことである。しかし、二の辞書の意味記述からも分かるように、現代語辞書ではこの意味については全く触れられていない。つまり、擬声語は「めく」と結合する他の語基と比べてもその歴史が古く、一語化しているということが分かる。

また、「めく」と結合する擬声語には、「きしきし」「からから」「ざらざら」のように物がぶつかったり、擦れたりする時の音や「こそこそ」「ざわざわ」「どしどし」のように人が立てる音「そよそよ」「さやさや」のように動物や自然現象による音などがある。(このように音の種類によっても用いられた時期がそれぞれ違うのであるが、ここでは触れないことにする。)

最後に、「擬態語+めく」の語例について分析を加えてみる。表六を見ても分かるように、擬態語は「めく」と結合する語基の中で最も造語力に優れている。特に、室町時代から江戸時代まで

に多くの語例が集中して見られるのである。

また、擬態語は人や物の状態、動きなどをまねして表した語であるので、擬態語と結合する「めく」は、一つは「」の状態になる。「もう一つは「」という動作をする」という意味で用いられる。

「めく」が状態を表す場合

煌めく…きらきらと輝いている。美しく光り輝く。きらきらする。

惚めく…眠気をもよおしてうとうととする。とろとろとする。

滑めく…ぬらぬらする。

きろめく…目がきらきら輝く。また、きよろきよろ動く。

ばさめく…ばさばさと乱れた感じになる。

痺めく…しびれる。また、皮膚などが刺激されて痛む。ひりひりする。

閃めく…光が瞬間的にひかって消える。ぴかっとな瞬ひかる。きらめく。

ふわめく…布などがふわふわとはためく。

すらめく…すらすらと、流暢にことが進行する。順調に行なわれる。うまくいく。

おどめく…おどおどする。こわがる。おそれる。驚く。

「めく」が動作を表す場合

眩めく…くるくると回る。

むくめく…虫などがむくむくと気味悪く動く。うごめく。

うじめく…思うように行動できないで、ぐずぐずする。また、

もじもじする。

うろめく…うろろろする。

ふらめく…ふらふらと動く。ゆれ動く。

ぶらめく…ぶらぶらとゆれ動く。ぶらぶらする。ぶらつく。

うごめく…(イモムシなどが這うように)絶えず少しずつ動く。

く。おごめく。蠢動(しゅんどう)する。

よろめく…足どりがふらついてよろよろする。よろける。よろぼう。

ろぼう。

「擬態語+めく」も「擬声語+めく」と同じように「」という動作をする」という意味記述は現代語辞書には載っていない。擬態語も擬声語も古くから用いられていたもので、現代日本語にも多くその語例が残っていて、「めく」が派生する動詞の大半を占めていることから、現代語辞書においても、そのような意味記述が必要であると思われる。

(五) 動詞を語基とするもの

動詞(または動詞の語根)と結合する「めく」は一一語であつて、表七を見るとその数は少ないが、中古から近世まで用いられつつづけていることが分かる。

表七 「動詞+めく」の初出

初出		語数
上代	奈良時代	0
中古	平安時代	2
	鎌倉時代	4
中世	室町時代	2
	江戸時代	2
近世	江戸時代	2
近代	明治時代	0
	大正	1
現代	昭和	0

「動詞+めく」

いきり・め・く 【熱―】〔自カ四〕…息まくだような風情で

ある。いきりたつた様子である。

いそ・め・く 【急―】〔自カ四〕…忙しそうに行動する。

いそいそと行なう。

いり・め・く 【煎―・焦―】〔自カ四〕…(器の中で物が

煎られるときのよう)動き騒ぐ。いら立つ。ひしめく。

もみ合う。

こび・め・く 【媚―】〔自カ五(四)〕…なまめかしい

感じになる。

たわぶれ・め・く〔たはぶれ〕 【戯―】〔自カ四〕…た

わむれたそぶりをする。ふざけたふりをする。

どよ・め・く 【響動―】〔自カ五(四)〕(一)「どよむ

(響動)【二(一)】に同じ。どやめく。(二)揺れ動く。

動揺する。

もたれ・め・く 【凭―】〔自カ四〕…いかにも甘え、頼

りにしている様子になる。

から・め・く〔自カ四〕…やせて、あぶらがなくなる。や

せほそる。干からびる。かさかさする。

こぜり・め・く〔自カ四〕…こせこせしているように見える。

ただ・め・く〔自カ四〕…〔胸がただめく〕の形で)はげ

しく動悸がする。どきどきする。

のの・め・く〔自カ四〕…ののしり騒ぐ。わいわい言う。声

高に呼ぶ。わめく。ののしる。

「めく」の主な働きは動詞を派生する文法的な役割である。そのため、上記の語例のように「めく」と結合する動詞には、動性よりも人の感情や物の状態を表す性格の動詞(または動詞の語根)が用いられる傾向があると思われる。また、動詞と結合する「めく」はその動詞が表す状態や感情をさらに強調して「〜のように見える」「〜らしくなる」の意で用いられている。

四 今後の課題

本稿では、現代語における「めく」の意味分析に留まってしまうが、今後は、史の変遷の過程にその重点を置き、さらに丁寧な分析を加えていきたい。また、「めく」と交替する「つく」と「だつ」に対する分析も同時に行っていきたいと思う。

《参考文献》

- 阪倉篤義『語構成の研究』（角川書店、一九六六）
関一雄「接尾語「ぶ」「む」「めく」「だつ」「がる」の消長（一）」
『山口大学文学会誌』30一九七九
山口豊「接尾語「めく」の消長」『言語表現研究』9兵庫教育大
学 一九九三
『日本国語大辞典』第二版 小学館 二〇〇一
『大辞林』第三版 三省堂 二〇〇六
『岩波国語辞典』第七版 岩波書店 二〇一一
『岩波古語辞典』補訂版 岩波書店 一九九〇
『古語林』大修館書店 一九九七
『新全訳古語辞典』大修館書店 二〇一七

（い じょんみん 大学院博士後期課程）